



Title	ポーの詩論とフランス芸術への影響
Author(s)	伊達, 立晶
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/264">https://hdl.handle.net/11094/264</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	伊達 立晶
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 16709 号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	ポーの詩論とフランス芸術への影響
論文審査委員	(主査) 教授 森谷 宇一
	(副査) 教授 上倉 庸敬 教授 森岡 裕一 助教授 加藤 浩

### 論文内容の要旨

本論文は、(1)19世紀前半のアメリカにおける特異かつ天才的な詩人・小説家として知られるポーの、詩論を中心とする諸思想を解明し、(2)それをふまえて、それらの思想が19世紀後半のフランスに移入されて、まったく革新的な芸術思潮が形成されるにいたった過程を跡づけようとしたものである。論文全体は5章からなり、第4章までが(1)に、第5章が(2)にあてられている。論文の分量は、本文が100ページ、註・文献表が25ページ、あわせて400字詰め原稿用紙換算で約420枚である。

第1章「『構成の哲学』とその瞞着」では、自作の詩「大鴉」の創作方法について解説しているポーの詩論「構成の哲学」が、大筋では彼の本意(特に「効果ないし印象の統一」という考え方など)を伝えるものでありながら、他の著作で重視されているイマジネーションについて語らず、当の詩がまったく数学的計算によって制作されたかのように述べている点で、瞞着を含むと論じられている。

第2章「詩的イマジネーション論の形成過程」では、ポーの詩的イマジネーション論が、その形成過程に即して、また特にイマジネーションとファンシーとの関係について、子細に検討されている。そしてイマジネーションとは結局、「天上の美」をめざし既存の素材(観念や言葉)の新奇な結合によって、新奇でありながら調和的な美を産出する能力であると結論づけられている。

第3章「イマジネーション論の諸相(1)——その唯物論的背景」では、ポーのイマジネーション論の背景には独特の唯物論的な懷疑主義があつて、後者がまた古代以来の思想史的背景を有していることがあきらかにされている。そしてそのような懷疑主義に立つポーにとって、詩ないし芸術とはおのずと、個物が融解した不明瞭な世界を表現すべきものであったと論じられている。

第4章「イマジネーション論の諸相(2)——仮説形成的推論」では、ポーによって演繹および帰納にまさるとされた、イマジネーションにもとづく推論という考えが、情報の整合的な結合によって蓋然的でありながら発見的な第三の推論形式を称揚したものであつて、プラグマティズムの創始者パースが唱えた「アブダクション」という考えの先駆けとなっていると論じられている。

第5章「ポーの詩論のフランス芸術への影響」では、ポーの思想が19世紀後半のフランスにおける二人の代表的な詩人、ボードレールとマラルメとの詩論と美術批評に継承されて、唯美主義や印象主義や象徴主義というまったく革新的な芸術思潮が形成されるにいたった過程が跡づけられている。そのさい特に、ボードレールにはイマジネーショ

ン論が、マラルメには「構成の哲学」が、それぞれ決定的な影響をおよぼしたとされている。

### 論文審査の結果の要旨

本論文の特長はなによりもまず、従来の研究の欠を埋めようとする強い問題意識に支えられていることである。すなわち上述のように特に19世紀後半のフランスにおいて形成されたまったく革新的な芸術思潮は、模倣説に立脚していく古典主義やロマン主義や写実主義に共通している伝統的な芸術観を根底からくつがえすものであったにもかかわらず、そのような変革が美学的に充分には解明されてこなかったという問題意識である。こうして論者はそのような変革を、ポーの思想とそのフランスへの影響という見地に立って思想史的に解明しようとしているのである。

そして論者のそのような意図はかなりの程度まで達成されている。特にポーの思想は充分に解明されているというべく、このことによって、天才的でありながら多分にエクセントリックとみなされなくもないポーの思想が充分に豊かで深い内実を有しているということがあきらかになったことは、本論文の最大の成果といえよう。とりわけ、ポーの詩論というときおおむね構成という教説のみが注目されがちであるのに対して、むしろイマジネーション論のはうにはるかに多くの比重をさいてその内実を徹底的に解明したことは、本論文の大きな功績である。

原典テクストや広く文献の博搜という点でも本論文はきわだっている。すなわちポーとボードレールとマラルメという三人が書きのこした原典テクスト、関連する資料的文献、研究文献のいずれの面でも精力的に博搜がなされている。

こうして本論文はまた学問的体裁においても申し分のない手堅い論考となっている。そのことは詳密な註と完備した文献表によっても示されている。

ただし本論文にも若干の難点を指摘できなくもない。とりわけ論文全体の比重という点からみたとき、ポーの思想自体をあつかっている部分（第4章まで）とくらべ、そのフランスへの影響をあつかっている部分（第5章）がやや手薄な感は否めないであろう。またあつかわれているのがほとんどもっぱら思想的言説であって、詩にせよ美術にせよ具体的な作品が主題的にはとりあげられていないことに、不満をおぼえるむきもある。さらに論旨の明快さという点では、もちろん及第点には達しているが、幾何学的明快さという理想に照らせばいさか改善の余地がなくもなかろう。

とはいえるこのような感想は、いわば望蜀の念に発するものであって、本論文の上述のような特長ないし成果をゆるがすほどのものではない。よって本審査委員会は本論文を、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。